No. 41. 1989. 3. 10

健康への道

名古屋大学総合保健体育科学センター

いわゆる公共騒音など

伊藤　章

私の家のすぐ隣に，せいぜい300㎡ぐらいの小遊園地がある。今日も日曜日のこととて可愛い子供たちの元気な声がきこえる。遊び場を失った子供たちのわずかながらの憩いの場であるので，少々の迷惑（日に何回もボールや紙飛行機をとりにくる子供への対応や，時には飛び込んでくるボールによる庭木や植木鉢の被害など）は辛棒している。子供たちは日暮とともに家に帰るので，まだよいが，夜間中学生のたまり場になったり，はては暴走族の集合場になると，ちょっと問題である。さらには一画に古い公民館があり連日のごとく夜遅くまで民謡や詩吟などの練習に悩まされる。夏になれば，ぼん踊りや老人慰安会で賑う。

いまや，都会で住むにはエアコンとともに防音設備が完備しなくては住めないかも知れないし，さらに飛躍して都会は働く場所であり，住む場所は郊外に求めるということになるかも知れないのではないか。

先日，名古屋市の地区公害対策審議会の席上，ある委員から救急病院の近くに住む住民は救急車の音に日夜悩まされているので対策を抗じてほしいとの提案がなされた。多くの他の委員は，なぜ，そんなことを……という，むしろ戸迷いの様子がみられ，しばらく重苦しい雰囲気が流れた。結局は，記録にとどめるという議長の裁定で決着した。2月21日のC新聞の辛口診断に広報塔公害という意見が出されている。岐阜県知事選挙の日広報塔（防災無線）からの騒音で，赤ちゃんはおきてむずがり，期末テスト中の中三は鉛筆を投げてヒステリーをおこした。名古屋に緊急避難した人もいる。消防訓練のサイレンとなるとさらに悲惨だ……という内容である。

学校保健の分野でも，学校や幼稚園などからの騒音が以前から問題にはなっているが，教育という大義名分の前に，少々のことはということで黙殺されることが多い。

かつて，私が入院中，市立の病院のすぐ近くの空地で盆踊りが行われ，連日その騒音に悩まされたことが思い出されるが，われわれの近くで，いわゆる公共の福祉のためということで不合理な騒音の影響をうけている人がいることも事実である。

航空機騒音，新幹線騒音など公共のための施設，設備などの騒音については，不充分ながら，それなりにとりあげられ，対策も少しずつ講ぜられつつあるようであるが，もう少し狭い範囲の身近な日常生活において，公共施設などからの騒音についても関心を持つことが必要ではないか。

住民の健康や福祉のための公共の設備や施設行事の果たす役割は大きいことは承知できるが，そこに安住して他人の生活や健康をおびやかすということにも，そろそろ目をむける時期がきているのではないか。

この稿を担当するにあたり，公共騒音なる言葉があるか，どうかを調べてみたが，行政はもちろん，学会でも，そういう言葉は使用されていないようである。従って標題を「いわゆる公共騒音など」としたことを御了承願いたい。

（保健科学部）